令和７年度共通教育　活動報告書

		P
Ⅰ	「共通教育実施委員会」活動の総括	1
Ⅱ	カリキュラム等編成部会	4
Ⅲ	自己点検・自己評価部会	5
Ⅳ	ＦＤ部会	6
Ⅴ	広報部会	9
Ⅵ	分科会報告	
1	大学基礎論分科会	11
2	学問基礎論分科会	13
3	課題探求実践セミナー分科会	16
4	国際コミュニケーション科目分科会	17
5	日本語・日本事情分科会	31
6	医療・健康・スポーツ分科会	34
7	キャリア形成分科会	38
8	芸術分科会	39
9	人文科学系領域分科会	42
10	生活・社会科学系領域分科会	45
11	自然科学系領域分科会	46
12	複合領域分科会	48

Ⅰ　令和７年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2026年3月31日

共通教育実施委員会

1．共通教育実施委員会および常任会議

本年度は新カリキュラムも2年目となり、FD 活動なども盛んに行われるようになった。さらにオンラインによる FD やアンケートなどの実施も定着し、より効率的・効果的な運営が行えるようになった。

本年度は、以下の2項目を重点事項とした。

- 共通教育の担当カリキュラムの実施
- 共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取組

それぞれの重点事項に関する成果は以下の通りである。

昨年度からの共通教育新カリキュラムに関しては、2年目ということもあり、大きな問題なく実施することができた。担当教員や事務の方々には篤く御礼申し上げる。

共通教育における共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取り組みについては、シラバスチェックが 5 年目となり、自己点検評価部会によって体制が整備され、シラバスにおける授業内容や評価基準をよりわかりやすく、明確に、学生に提示できるようになった。新年度からはシラバスの様式も変更されるため、新たな様式に沿ったシラバス執筆について、チェックを行った。

2．部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD 部会」、「広報部会」の4部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する（詳細は各部会の報告を参照）。

カリキュラム等編成部会では、新カリキュラムによる編成を3回の部会開催を通じて順調に進め、新カリキュラムに沿った授業題目表を作成することができた。

自己点検・自己評価部会では、「e-ポートフォリオ」を活用した授業評価アンケートの実施を依頼した。またシラバスに関し、各分科会でチェックをピアレビュー等を使って行うシステムを構築し、実施した。

FD部会では、国際コミュニケーション科目分科会、日本語・日本事情分科会、医療・健康・スポーツ分科会・キャリア形成分科会、芸術分科会、複合領域分科会においてFDが行われた。またFD・SDウィークでは44科目で授業参観が行われた。上記の通り、新型コロナウィルスの影響も和らぎ、活発な活動が行われた。

広報部会では、『パイプライン』第 65 号を発行した。昨年度から年に1回の発行となったが、

その分、充実した内容にすることができた。

3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである(詳細については各分科会の報告を参照)。

(1) カリキュラム編成の取り組みについては、分科会ごとの個別の報告に譲るが、どの分科会も問題なく編成することができた。

(2) 各分科会の取組は、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、各学部で各学部において moodle によるオンラインコンテンツの利用、対面でのゼミではグループワーク等を行うことで、受講生間や教員との意見・情報交換を活発に行うといった取り組みが行われた。

学問基礎論分科会では、委員や授業担当教員の間で適宜情報交換を行いながら、次年度のカリキュラム編成と自己点検評価活動を行い、また『パイプライン』への執筆を行った。

課題探求実践セミナー分科会では、部会長や授業担当者の FD セミナーへの参加が活発に行われた。また、授業改善アンケートを行った。

国際コミュニケーション科目分科会は、教員が減少する中、授業のオンライン化への検討が行われた。また、2回の FD 講演会を開催し、ゲストをお呼びしてレクチャーを行い、情報交換や意見交換を行った。さらに、前期・後期の試験期間終了後に受講生による授業評価アンケートを実施した。

日本語・日本事情分科会では、自己点検評価・ＦＤ活動を実施するとともに、ＦＤ研修に参加した。

医療・健康・スポーツ分科会では、教員不足の中、効果的な授業を行えるような検討を行ったまた、時間割の編成についても検討を行った。さらに、「健康」において授業評価調査を行った。さらに「フットサル」にて FD 活動を行った。

キャリア形成分科会では、全学のキャリア形成に関する動向を把握することに務め、またシラバスチェックを行った。

芸術分科会では、演奏会・展覧会における FD を実施し、またアンケート調査を行った。

人文科学系領域分科会では、「図書を活用した教材開発と授業改善」をテーマに FD 活動を行った。

生活・社会科学系領域社会分野分科会では、独自の FD やアンケート等は行わず、他分科会の FD などに参加するほか、カリキュラムについての検討を行った。

自然科学系領域分科会では、退職教員に係るカリキュラム編成の検討を行い、教員間で意見交換を行った。

複合領域分科会では、「文理融合」を実践できるような授業の開発について、意見交換を行った。

4. その他

⑴『令和7年度共通教育実施委員会活動報告書』は、4月中に発刊し、WEB 上で公開する。

⑵ 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

Ⅱ　カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 田鎖数馬（人文社会科学部）

1. カリキュラム等編成活動の経過

2025 年 7 月 7 日 第 1 回カリキュラム等編成部会（オンライン）

主管臨席のもと開催された。共通教育授業担当体制の決定方法について説明を行った後、令和 8 年度共通教育授業担当体制について原案どおり了承され、各分科会へ提示することが決定した。

2025 年 10 月 9 日 第 2 回カリキュラム等編成部会（オンライン）

令和 8 年度の担当科目数に対する各分科会からの回答状況について説明を行った。審議の結果、次年度の分科会担当科目数について、異議なく了承された。また、令和 8 年度共通教育科目の開講予定科目数（案）が確定された後、授業題目表の作成依頼を行うことの説明を行い、審議の結果、異議なく了承された。また、令和 7 年度第 2 学期開講科目の変更点について報告するとともに、カリキュラム等編成部会から機構及びセンター等所属教員へ担当依頼を行う旨、報告した。

2025 年 1 月 20 日 第 3 回カリキュラム等編成部会（オンライン）

令和 8 年度共通教育カリキュラム題目表が出そろったことを説明し、各分科会長に対し、再度提出いただいた授業題目の内容に誤り等がないか確認いただきたいと依頼した。また、令和 8 年度新規開講科目として、機構・センター等所属教員から申請のあった 3 題目について説明が行われ、審議の結果、異議なく了承された。

2. 2025 年度カリキュラム等編成活動の総括

次年度に向けたカリキュラム編成は、全体的にほぼ順調に進めることができた。編成作業に当たられた各分科会長をはじめ、各学部・機構・センター所属教員、共通教育係など関係者にあらためて謝意を表したい。

担当教員の不足は、変わらず深刻な問題である。どの分野においても退職、転出による影響などが相対的に大きくなるリスクが想定されるのであり、そのような場合の分科会と本部会、共通教育係の密接な連携が求められる。限られた人数と予算の中で、学生の不利益にならないよう、緊急避難的な非常勤講師の雇用も含めた柔軟な対応と、カリキュラムの円滑な運営・実施が必要となるだろう。

Ⅲ　自己点検･自己評価部会

自己点検･自己評価部会長　俣野秀典（地域協働学部）

1. 令和 7 年度活動の概要

授業アンケート、シラバス点検、成績分布の検証、新カリキュラムの効果測定の検討の四つを活動計画書に記載しており、すべて実施された。加えて、シラバス作成についてのポイントをまとめた資料「シラバス作成のポイント」を作成し、共通教育担当教員に配布した。シラバスの役割、目的・到達目標の表記、授業計画、評価情報、オフィスアワーなどについて、書き方の Tips が A4 1 枚でまとめられており、共通教育だけでなく専門科目でも活用できるものである。

以下では、本部会の主要な活動である「授業アンケート」「シラバス点検」の 2 項目について採り上げることとする。

2. 授業アンケート

継続的向上活動として、e-ポートフォリオを活用した授業アンケート（授業改善／授業評価／Reflective Monitoring）の実施促進を行った。具体的には以下のとおりである。

本部会では、学期ごとに第 5･15 週が近づいたタイミングで、学務課共通教育係を通じて、授業アンケートの実施を授業担当者へ依頼する。授業担当者がその目的や時期に応じて、「授業改善アンケート「授業評価アンケート」「Reflective Monitoring」の 3 種類から選択できるようになっている。授業改善アンケート（選択肢式および記述式から選択可）は、5 週目に実施した上で、アクションプランを 7 週目に提示、15 週目にその効果を点検し次年度に繋げることが想定されている。

本年度は 32 科目（1 学期：22 科目、2 学期：10 科目）で実施された。の他、各分科会主導や授業担当者個人による授業アンケートも実施されている。

3. シラバス点検

授業担当教員が入力した共通教育科目のシラバスを、各分科会の連携と協力のもと点検した。第 1 回 自己点検･自己評価部会を 1 月 9 日に開催し、来年度の共通教育科目におけるシラバス点検に向けての審議を行った。

シラバス点検は、各分科会の自己点検･自己評価担当者（副分科会長）および分科会長に、確認期間開始にあわせて入力後のシラバスが共通教育係から送付され、開始された。シラバスの修正が必要な科目があった場合には授業担当教員に修正を依頼した。約 1 週間後の修正確認期間に最終点検し、修正が行われていない場合は再度依頼した。その後、共通教育シラバス点検結果報告書を各分科会の自己点検･自己評価担当者に作成いただき、シラバス点検は完了した。

Ⅳ　ＦＤ部会

部会長　波多野　慎悟

今年度は FD・SD ウィークで 44 件の授業参観が実施された。重複する科目を１と数えると８件であり、内訳は人文分野１（ガムラン演奏基礎演習）、、社会分野１（高知の中小企業を知る）、キャリア形成支援科目５（IELTS/TOEFL/英検対策コース、プロフェッショナルコミュニケーションのための英語、International Media and Journalism、キャリア戦略立案入門、キャリアで活かす IT リテラシー）、初年次科目１（学問基礎論（医学部））であった。

また、各分科会から報告していただいた FD 活動は以下に記す。

国際コミュニケーション科目分科会からは、２件の活動報告があった。

1. 2025 年 9 月 5 日（金）に東京外国語大学 Lingua Test Center（以下、LTC と表記）所属のマシュー・ミラー講師を招聘して、外国語運用能力を総合的に測る CEFR-J “can-do” descriptors に基づいた外国語教育のあり方と能力テスト作成の問題に関するワークショップを実施した。ワークショップの最後には、CEFR-J が高知大学 EPIC プログラムでどのように総合的に使用されているかについて、より広範な議論が展開され、講師からは CEFR 評価の原則を EPIC カリキュラムに組み込むためのより具体的な方法が提案された。
2. 2026 年 3 月 13 日（金）に早稲田大学名誉教授藤井明彦氏をお招きし、FD 講演会を開催した。前半部では同氏から大学内のみならず NHK ラジオ講座など精力的に語学教育に携わってこられた豊富な経験を基にした実践的な語学教育の方法論について講演いただいた。後半部では同氏を囲みつつ、主に高知大学で語学教育に携わる出席者の先生方を交えた形で、高等教育機関での外国語科目のあり方、より具体的にはシラバスの作成方法や教科書の選び方、試験問題の作り方など外国語教育に関する情報の共有や意見交換を行った。

日本語・日本事情分科会からは、２件の活動報告があった。

1. 日本語IIIの授業内で学生によるレビュー活動を実施するとともに日本語III、日本事情III・IVでは、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。
2. オンライン授業やアクティブラーニングに関する FD 研修を個人ベースで受講し、授業のさらなる改善に努めた。

医療・健康・スポーツ分科会からは、１件の活動報告があった。

1. 「スポーツ科学実技（フットサル）」を対象として、実際の授業場面を参観し、授業設計・

運営方法、学生の学習過程および教育効果について検討することを目的として実施した。試合の様子や、試合後に実施する学生間での振り返りミーティングから、本授業がシスティマティックに工夫された教育的価値の高い実技授業であることが認められた。本授業で得られた知見を他の実技科目や共通教育全体へと共有することにより、大学における実技教育の質的向上につながることが期待される。

キャリア形成分科会からは、１件の活動報告があった。

1. 「SBI（Society Based Internship）」を対象として、本授業の講師ならびに関係教員４名と受入企業３社の社長や SV（企業側の学生支援社員）の上司ら５名で、実習後の意見交換会を行った。教員側からは SBI 後に学生・SV 対象に実施したアンケート結果や実習前後での学生の変化、企業側からは実習後の SV や周りの社員の変化などの情報を提供し、授業の効果を検証した。

芸術分科会からは、１件の活動報告があった。

1. 新カリキュラムにおいて「生きる力を育む科目」に位置づく芸術分科会が、共通教育の中でより実践的に機能するために、学内の芸術系教職員の作品や演奏、研究内容を広く公開し、芸術文化の向上に資する作品展・演奏会を FD 活動として行った。

<u>対象となる演奏会および展覧会</u>

【演奏会】担当：大山先生
題名：「あさくらシック！Vol.1　ウヴェ・コミシュケ氏を迎えて」
日時：2025 年 10 月 19 日(日)14:00〜15:30
【展覧会】担当：美術教員
題名：Art Research Exhibition
会期：2025 年 11 月 1 日（土）〜11 月 25 日（火）
【演奏会】担当：梶原先生
題名：ファミリーコンサート
日時：2025 年 12 月 21 日(日) 10:30〜11:30

これらの鑑賞会のアンケート結果から、音楽と美術ではそれぞれの分野についてよく知らないという前提で FD を開催したが、今回の FD を通してこれまで気づいていなかった両者の魅力を再確認できたことが見て取れた。

複合領域分科会からは、以下の４点について報告があった。

1. 複合領域分科会または担当者間の意見交換
Teams 内に立ち上げたチーム「共通教育複合領域分科会」において複合領域分科会長

が参加したイベントなどの情報共有を行い、それに対する意見等を述べる機会を作った。具体的には、他以下のイベントである：

・「第 72 回中国・四国地区大学教育研究会」（令和 7 年 6 月 14 日、島根大学、オンライン）

・「内閣府総合知ワークショップ@岡山大学」（令和 7 年 9 月 22 日、岡山大学、オンライン）

・「学士課程の共通教育に求められるコンセプトと設計 ～金沢大学共通教育改革を中心に～」（令和 7 年 10 月 21 日、金沢大学、オンライン）

2. SPOD フォーラム（8 月開催）への参加

SPOD フォーラムでは、「分野横断・分野融合の学びの価値とカリキュラム設計を考えよう！」というプログラムに複合領域分科会長が参加してワークに取り組むなどの活動を行った。

3. 全学 FD フォーラム（10 月開催）への参加

今年度の全学 FD フォーラムはキャリア開発に関する内容であったが、「ライフキャリア」という文脈から生じる「生涯学び続ける」ことの必要性という観点から見ると、「分野横断の学び」は、「興味の広がり」や「キャリアの選択肢の拡大」を生み出すことから、学び続ける動機を強くすることにもつながるため、全学 FD フォーラムに参加することにより分野横断的な学びが大切であることを改めて認識できた。

4. その他 FD 活動

令和 7 年度の FD 活動のうち、複合領域担当者（令和 7 もしくは 8 年度担当）が参加した代表的なものは以下のとおりであった。

4 月	大学授業入門	1 名
2 月	全学 FD フォーラム	7 名
2 月	リフレクションセミナー	1 名
	グループワークのためのファシリテーション入門	1 名
	学生の主体的な学習を促す非同期型オンライン授業	1 名
前期・後期	グループワークのはじめ方	1 名

Ⅴ　広報部会

部会長 山崎聡

1　本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

小川寛貴（人文社会科学部）、加藤治一（理工学部）、大坂京子（医学部）、中村洋平（農林海洋科学部）、松本明（地域協働学部）

2　本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年 1 回）、電子化された『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

3　本年度部会の活動報告

3-1）概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第 65 号を 3 月に発行（予定）した。

3-2）部会議事と関連会議事項

・第 1 回部会（メール会議：令和 7 年 10 月 9 日）：議題『パイプライン』第 65 号発刊計画および令和 7 年度活動計画について

・パイプライン発行にあたって、65 号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。

・今年度の活動計画と予算案について諮り、承認された。

・特集は、新体制スタートに伴い、「導入科目群」とした。

3-3）本年度の審議内容の概要

3-3-1）『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

・例年どおり、『パイプライン』の読まれ方に関して、当該ウェブサイトへのアクセス数の調査を実施した。

・今年度も昨年度に引き続いて、発行のアナウンスを、グループウェア、KULAS、Facebook および学生掲示板を通じて行い、より多くの人々に周知するよう努めた。

3-3-2）『パイプライン』の編集・発行について

・第 65 号を令和 8 年 3 月に HP に掲載（予定）した。
　特集は「導入科目群」であった。

導入科目（大学基礎論，学問基礎論，課題探求実践セミナー）について、各学部の担当者からご寄稿いただいた。

事務方にも執筆いただいた。

4　次年度（以降）の課題

・共通教育新体制に伴い、『パイプライン』の編集も刷新されることとなった。これまでの年 2 回発行から 1 回発行へと方針を変え、より充実した密度の濃いコンテンツとしていくことが望まれる。
・引き続いて、『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容（構成）へと高めていきたい。
・アクセス数増加のための手段については、依然、検討対象となっている。
・新体制下で各分科会が再編されることに伴い、新しい編集方針として、導入科目群を筆頭に、カリキュラム編成を順次紹介していくことにした。
・加えて、カジュアルな形でも良いので、どんな情報や記事が望まれるかについて上級生らにアンケートを今後実施していきたい。

Ⅵ　分科会報告

１ 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長　鈴木保志（農林海洋科学部）

本科目の授業形式や教員の担当方式等は各学部で決定し、実施しているが、共通する目標は以下の３項目である。

① 大学で学ぶことの意義と目的について考え、「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換する。
② 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。
③ 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これら 3 項目について考える作業を講義やグループワークで行うことによって、コミュニケーション能力の向上、議論の進行方法及び合意形成手法の修得を図る。これを受けて、大学基礎論の教育目標が達成されるようカリキュラム編成を進めると共に、必要に応じて授業改善に向けた自己点検・評価活動、並びに FD 活動を実施した。

1. カリキュラム編成

昨年度から講義は完全に対面形式で実施されている。さらに、過年度以来、moodle による非同期型オンライン形式の講義や授業時間外の活動を想定した Microsoft teams を活用した共同作業も適宜取り入れられている。アカデミックライティング等では共通のコンテンツも活用できるようになった。これらを踏まえ、次年度における各講義の内容について検討を行った。各講義の配置に至った各学部の経緯、担当教育母体の意思等を確認し、ほぼ例年通りのカリキュラム案が了承された。

2. 自己点検評価活動

令和 4 年度は、本学の新型ウイルス感染症対策に従い、一部の講義でオンライン講義が実施され、レポートや課題提出状況によって評価される場合もあった。これに対し昨年度（令和 5 年度）からは、コロナ禍前と同様、大学基礎論はグループワーク等の演習を対面形式で実施するようになっている。

昨年度までは KULAS の WEB アンケートを活用して授業アンケートを実施したが、今年度からは実施しないこととなった。このため、学部等の各実施単位で自己点検評価活動を行うこととした。

3. FD 活動

本分科会の位置づけ、並びに取り組み状況を委員間で共有した。他の分科会や大学全体での FD 実施に関連する情報については担当委員内での共有を図った。

コロナ禍以来オンラインコンテンツの有効利用が進められている。さらに昨年度来の経緯と成果を考慮して、moodle によるオンラインコンテンツの利用、対面でのゼミではグループワーク等を行うことで、受講生間や教員との意見・情報交換を活発に行うといった取り組みが行われた。それぞれ学部、学科、コース等の単位で FD を実施しながら、授業改善に取り組んだ。

２　学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 小野寺栄治

1. 学問基礎論分科会の運営体制

学問基礎論の主な内容と学習到達目標は以下のように設定されている。

専攻する学問の輪郭を学びます。それぞれの学部・学科で学べる専門分野や研究テーマについての知識を得て、専門教育でこれから学んでいく際の展望を持つことが目標です。このほか、文献検索の方法、学術論文の読み方、レポート作成の技術など、専門教育で必要となる基礎的な知の技法を身につけます。

この目標の達成に向けて、各学部・学科（分野、コース）において、それぞれの裁量と工夫により、授業形態や授業方法及び教員の担当方式等を決定し、2年次以降の専門科目を見据えた授業が行われた。学問基礎論分科会としては、委員や授業担当教員の間で適宜情報交換を行いながら、次年度のカリキュラム編成と自己点検評価活動を行うことを基本とした。なお、本年度の学問基礎論分科会委員は以下に示す計7名の委員で構成された。

分科会会長： 小野寺栄治（理工学部）、
副分科会長（FD 部会）： 中澤純治（地域協働学部）、
副分科会長（自己点検・自己評価部会）： 渡邉裕子（人文社会科学部）
その他の委員： 宮本隆信（教育学部）、續木大介（理工学部）、藤田博一（医学部）、松川和嗣（農林海洋科学部）

2. カリキュラム編成

カリキュラム等編成部会（第1回：7月7日、第2回：10月9日）及び共通教育実施委員会（第1回：5月30日、第2回：7月30日、第3回：11月6日）を経て、次年度の共通教育科目の開講予定科目数が確定された後、示されたスケジュールに沿って授業題目表の作成およびシラバスの作成が進められた。

令和6年度に共通教育が再編されたが、学問基礎論分科会においては、「学問基礎論」の開講予定科目数やカリキュラムを学部・学科毎の裁量に委ねる形が維持されている。

3. 自己点検評価活動

授業ごとに必要に応じて受講生アンケートを実施する等による自己点検・評価活動を実施した。それらの例を以下に挙げる。

（1）　教育学部の学問基礎論（全6クラス）では、以下のように実施された：
学生の学びを確認する目的で毎時間授業終了時に「リアクションペーパー」という形で、授業の振返りを登録してもらい、学生、教員ともに学びの理解度を確認した。また毎時間、事前に Moodle への学修資料提示を行い、学生が自分のペースで学びや振り返りが行えるようにした。授業終了後には、「学修 e-ポートフォリオ」を用いて、受講者への授業評価アンケートを実施し、授業改善のための資料として今後に活用する。

（2）　人文社会科学部の学問基礎論では、以下のように実施された：
人文科学コースでは、アドバイザー教員による学生面談を実施し、学生には今年度の振り返りをおこなってもらい、次年度に向けた計画や今後何を研究していきたいのかを話してもらった。その際、e-ポートフォリオも活用している。FD 自体はおこなわなかったが、学生からの要望についてはコース教務委員会で共有し、次年度の大学基礎論、課題探求実践セミナー、学問基礎論等の授業構成の参考にしている。
国際社会コースでは、コース教務委員会の場で何度か課題の共有と来年度以降に向けてのブレーンストーミングのようなものを行った。
社会科学コースでは、学問基礎論に関するアンケートと教員による FD を行っている。基本的には学生から良かった点と改善点についてアンケートを収集し、それを基に次年度の方針を決定している。また、学生に関する情報（特にメンタル面）の共有を図り、次年度以降のゼミ科目に活かしている。

（3）　理工学部の情報科学科の学問基礎論では、以下のように実施された：
「これまでと同様に Moodle を使った資料提示や課題提出などを行った上で、対面授業を中心に、一部収録動画を用いた非同期オンライン授業を実施した。理解度を確認する試験を3回に分けて実施することで、学生が授業を受講する姿勢は緊張感を保つことができている。また本学科では Moodle に課題を提出していれば3回それぞれの試験の2日前に課題の解答例を閲覧できるようにしており、この方法によって、課題の取り組み状況が改善されているように感じている。」

（4）　医学部の学問基礎論では、以下のように実施された：
行動科学をテーマに授業を展開した。具体的には、脳の基本的な構造と働き、記憶、感情、学習、睡眠、行動変容、ストレス、薬物依存など、解剖学、生理学、精神医学、公衆衛生学といった学問領域を扱った。また、今年度から、医学科のIRデータを活用して、「医学科のカリキュラムにどう立ち向かうか」というタイトルで、どのようなところで躓きやすいのかなどについて考える授業も加わった。高知県立高知城歴史博物館館長による「土佐の医学史」も扱った。
授業ごとにアンケートを実施し、「1 年生は医学に関する授業がないので、興味を持つことができた」「2 年生以降、どんな勉強をしたら良いのか少し知ることができた」といった肯定的な意見が多く寄せられた。

2月下旬から3月下旬にかけて、次年度開講予定科目のシラバスの点検・修正・修正確認が行われた。学問基礎論分科会においては、点検対象となった「学問基礎論」のシラバスを副分科会長（自己点検・自己評価部会）の渡邉裕子先生に点検していただいた。そのご尽力に感謝したい。

4. FD 活動

それぞれが必要に応じて全学の FD・SD 授業参観に参加したり、授業を担当したりすることを通じて、教育の質の改善・向上を試みることとした。分科会全体としての独自の FD 企画は昨年度に引き続き行わなかった。

5. その他

共通教育広報誌『パイプライン』の特集記事：「導入科目群・大学での学びかた科目：大学基礎論，学問基礎論，課題探求実践セミナー」に掲載するための原稿の執筆依頼をいただいた。学部選出の委員全員が、依頼内容に沿って各自の創意工夫・裁量のもとで原稿を執筆した。

以上

３ 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長 市川昌広

―カリキュラム編成活動―

令和７年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部に依頼し、それ以外のセミナーについては各学部の担当者に授業実施を依頼した。

―自己点検・評価活動―

課題探求実践セミナーでは、今年度から分科会全体での授業評価アンケートを実施せず、学部等の各実施単位で自己点検評価活動を行うこととした。

２月から３月にかけて、課題探求セミナーのシラバスチェックをおこなった。

シラバスチェックでは、各学部とも適確なシラバスが作成されていた。

以上のことより、同セミナーは、課題探求・問題解決力、および協働実践力習得に向けたイントロダクションとして、課題探求実践セミナーがその役割を果たしていると考えられる。

―FD 活動―

カリキュラム編成については各学部に依頼しているため当分科会における FD 活動は、委員各自の FD 参加(たとえば全学 FD フォーラムなど)を除けばとくに実施していない。

４　国際コミュニケーション科目分科会

カリキュラム：准教授　西尾　美穂
自己点検・自己評価：教授　高橋　俊
FD：土屋　京子

カリキュラム

今年度で人文社会科学部に所属し大学英語入門の授業を担当していた教員が１名退職する。また、大学英語入門を担当していた非常勤講師３名も来年度からの授業担当を辞退した。そのため来年度の大学英語入門の担当者探しと授業編成にたいへん苦労した。また、英会話に関してもこれまで担当していた非常勤講師が来年度の授業を担当できなくなり急遽代替となるネイティブスピーカー（またはそれに準ずる人）を探す必要があった。共通教育の英語の授業は、まさに綱渡り状態で維持されていると言っても過言ではない。そこで、教育のレベルを維持しつつ、持続可能な授業形態と授業担当体制を構築するためワーキンググループ（人文社会科学部宗洋教授が座長）が立ち上げられた。大学英語入門の授業形態が主な検討課題となっている。様々な方策が検討された中でオンライン化が最善の策と考えられ、かなり具体的な案が立てられ練られつつある。

自己点検・自己評価

共通教育外国語分科会自己点検評価部会では、1 学期・2 学期の期末試験終了後に受講生へのアンケートを実施し、1 学期は 780 件、2 学期は 382 件の回答があった。以下、気づいた点を列挙していく。

・2 学期の回答数が前期より大幅に減った。回答数を増やすための取り組みが必要である。

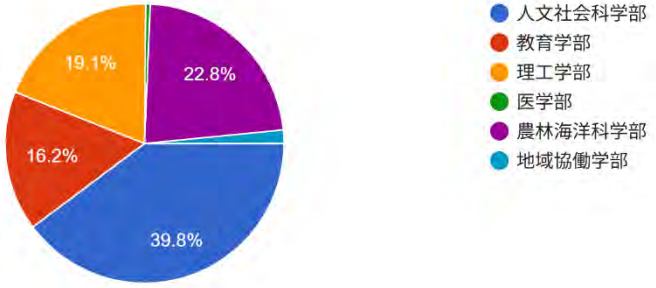
・個別のコメントは、ほとんどが好意的なものであった。

今後も継続してアンケートをとり、授業の改善に役立てていく予定である。

アンケートが大部になるため、本報告書には 2 学期分のみ掲載する。

あなたの所属を下記から選んでください。

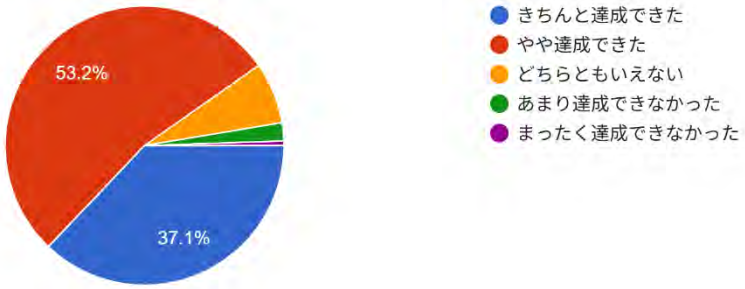
382 件の回答



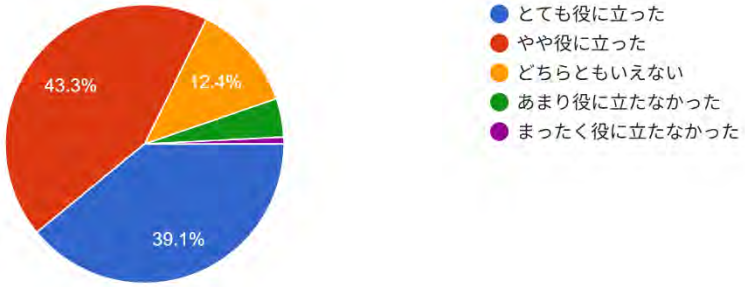
問1　あなたが受講した授業（このアンケートの対象となる授業）は次のどれですか。

382 件の回答

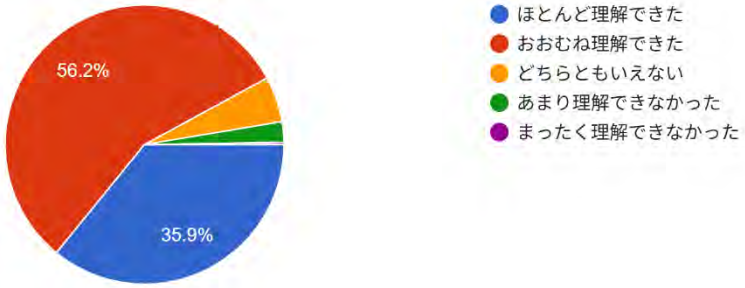
問2　シラバスの到達目標は達成できましたか。
380 件の回答



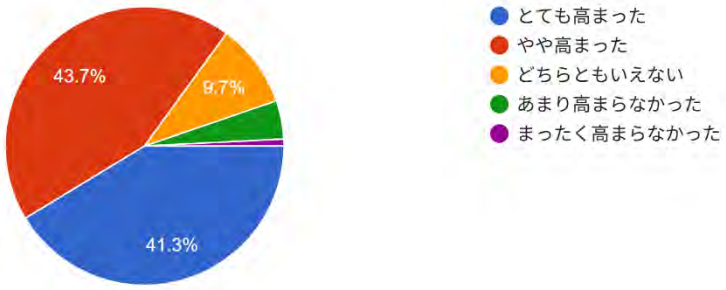
問3　シラバスは授業の履修に役に立ちましたか。
379 件の回答



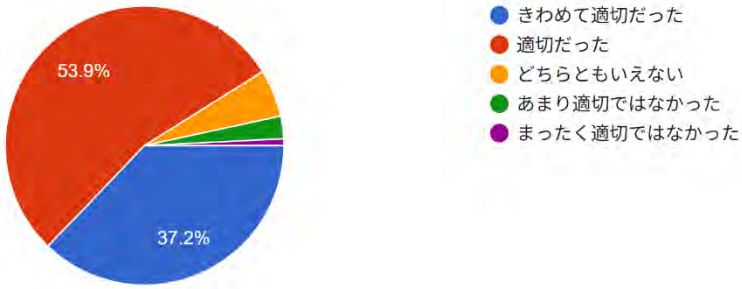
問4　授業はどのくらい理解できましたか。
379 件の回答



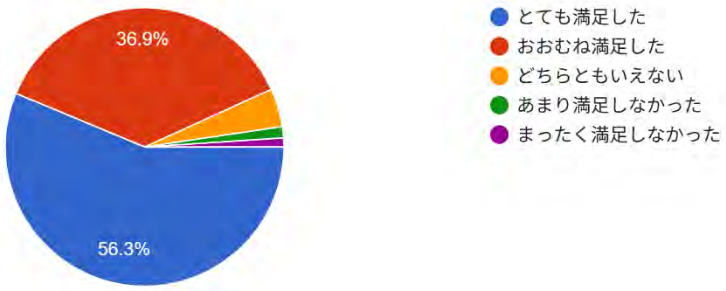
問5　受講した外国語への学習意欲は高まりましたか。
380 件の回答



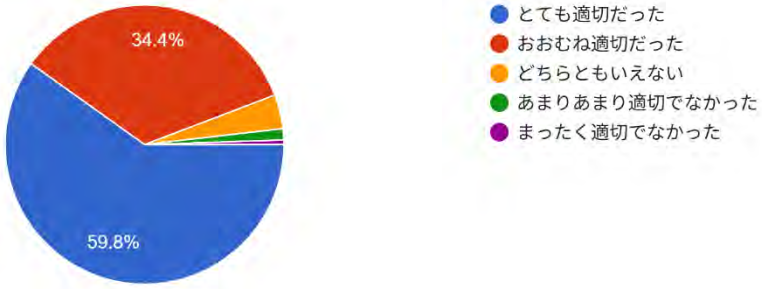
問6　授業の難易度は適切でしたか。
382 件の回答



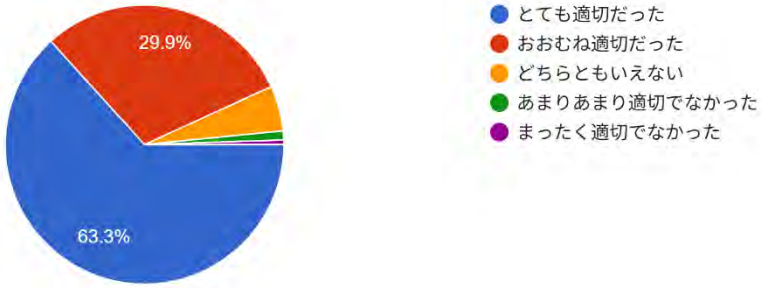
問7　この授業に満足しましたか。
382 件の回答



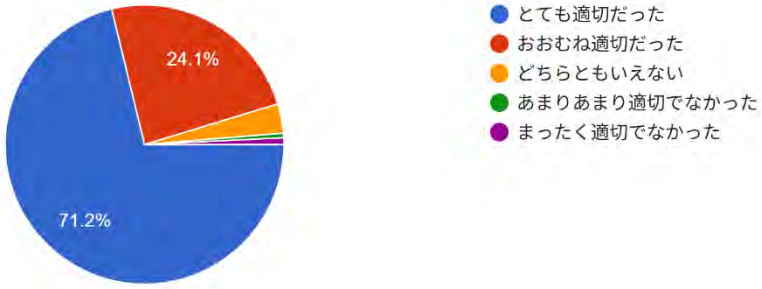
問8　授業の進度は適切でしたか。
381 件の回答



問9　教科書や配布資料の使われ方は適切でしたか。
381 件の回答

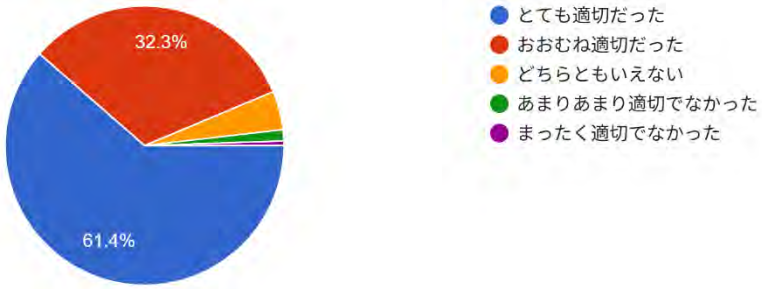


問10　教員の話し方は適切でしたか。
382 件の回答



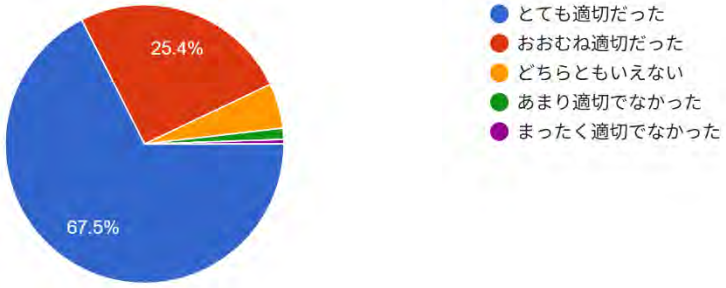
問11　板書や資料提示は適切でしたか。

381 件の回答

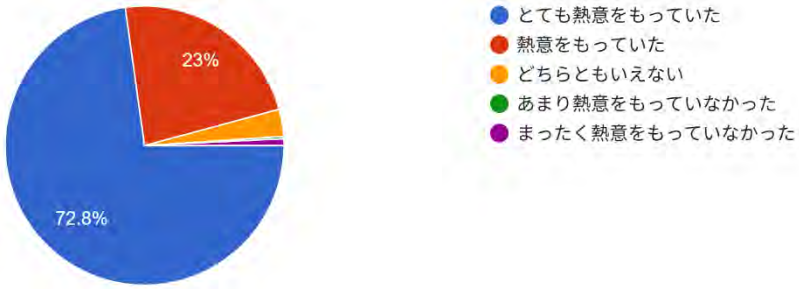


問12　意見や質問への対応は適切でしたか。

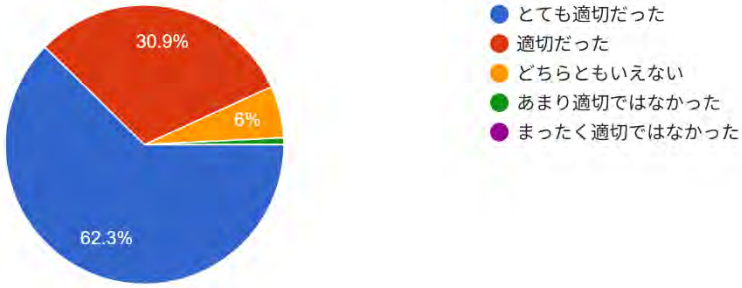
382 件の回答



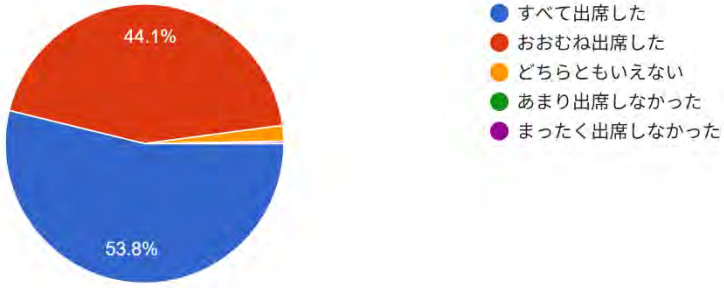
問13　教員は熱意をもって授業に取り組んでいましたか。
382 件の回答



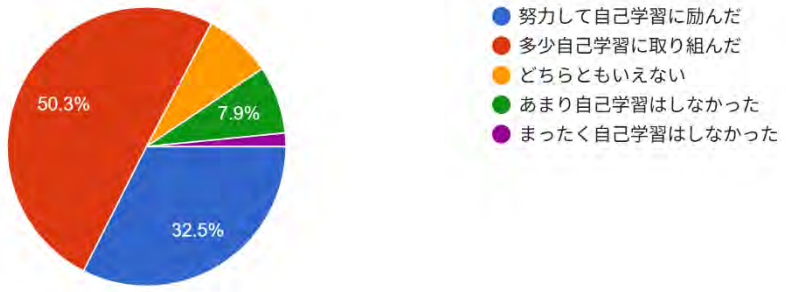
問14　中間試験や期末試験の出題内容は適切でしたか。
382 件の回答



問15　授業にどの程度出席しましたか。
381 件の回答



問16　受講した言語に関して自己学習（授業の予...試験準備以外の学習）をどの程度行いましたか。
382 件の回答



自由記述

楽しく学べました
ドイツ語に関しての知識を深めることができました
先生の人柄がとても良くて楽しかった
授業内で同じクラスの人と交流する機会があってよかった
なし
先生が面白かった
みんなと関わる機会が多い英会話だったので、とても楽しく英会話をすることができた。英語を使った会話が普段ないため、いい機会となった。
時制の説明が特に分かりやすいと感じました。
英語を楽しく学べる良い授業でした！
ドイツ語楽しかったです！
毎回単位ごとの小テストがあったので理解が深まった。
中国語への興味が湧いてくる授業でした。
遊びを含めての会話が多かったので楽しかったです
楽しかったです

内向的なので人と話すことに重きを置く英会話の授業は多少きつかったですが、これも何か意味があることと信じています。！
質問内容が聞き取れなく、クラス全体で返答ができなかった時に不機嫌になるのはどうかと感じた。
英会話のメンバーがほとんど変わらず楽しさが減った
英会話Ｉより楽しく意欲的に取り組めたので良かったです。
中国語に限らず中国の生活文化なども教えていただき楽しかったです。
授業を介さなかったらおそらく確実にドイツ語に触れることはなかったので、言語の幅を広げることができてよい機会だったと思います。ネイティブの先生に教われるのはドイツ語を深めたい人にとってはとてもよいですね。
英会話の授業を通して、自分のスピーキング力の無さを実感しました。私は国際社会コースに在籍しているため、他の学部学科よりも英語の運用能力を求められると思うので、自主的にスピーキング力の向上を目指した勉強や実践を行なっていきたいです。
とっても楽しい授業でした！約４ヶ月間ありがとうございました！！我愛你😊💖
スペイン語の授業を通して、やはりＩよりも難しくなっており、ついていくのが大変でした。しかし、そのための自学自習が必要なはずが、個人的には必要以上にできていなかったと感じたので、今後第二言語を勉強していくときは、サボらず継続して努力していきたいです
とてもわかりやすく、英語に対しての意欲を高めてくださってほんとうに感謝しています。
国際英語を受講したが、とても良い先生で、一人一人に対して丁寧に接し、授業の内容も課題も学生のレベルによって柔軟に対応、評価しておりとても良い授業だった。
フランス語の授業で、文法とか以外にもフランスの暮らしや文化を教えてくださってとても楽しかったです。
グループワークや、クラスの全員と話すことができて、アウトプット重視の授業で楽しかったです。
とても楽しかったです。

質問に丁寧に回答していただけて嬉しかったです。おかげさまで理解しやすかったです。
高校まで触れてこなかった言語を学習するのは、とても興味深く感じた。
英会話だけど、文法も学べて良かったです。
毎回、話すメンバーが変わって英語が苦手でもコミュニケーションを取ることが以前より楽になった。
英会話のレベルも高く非常に良かった
中国語の基本的な内容を理解できて良かった
とても良い授業でした。
少し難しい授業でした。
○○先生ですが休講が多すぎます。家庭の事情もあるかとは思いますが流石に多すぎです。
日本のことを英語で教えるということが自分のよく知っていることを知らない人に英語で伝えるということに繋がってとても楽しかった。
覚えないといけないことを覚える時間を確保するためにもう少し小テストなどを実施していただいてもよかった
いつ行っても教員が 1 番元気だった。
先生は全 30 回の授業のうち、1 回しか授業の開始時間に合わせて来なかった。学生は毎回時間通りに来ているのに、毎回 3〜5 分遅れてくることに不信感を持った。先生の時間感覚が普通の人とずれていると思う。
もっと中国語を学びたいと思った。
○○先生の授業でしたが、みんな当てられていたが自分は一回も当てられたことなく露骨に嫌われていて授業に行きたくなかった
オンライン講義の際には Outlook やクラスでの連絡があって欲しかった シラバスでは予定表が無く試験勉強を行う際にかなり困った
楽しく英語を学ぶことができた。
英語以外の外国語を学んで文化の違いなども感じることができた。
毎度時間を十分に設けてくれて、非常にやりやすかった。
第二言語の学習に対し興味を持つことができてよかった

TOEIC の自己学習への意欲が高まった
授業を通して英語を楽しく学ぶことができた。
言語だけでなくフランスの文化をたくさん教えてくださり、とても充実した時間だった。
楽しく学べた。今後も楽しい授業をお願いします。
授業で学ぶことに関して、補足で単語などを教えてくださり、とても勉強になった。
文化などの解説が面白かった
先生が物部キャンパス周辺でゴミ拾いしていて、人柄が素敵な先生に教えていただけてよかった。
教科書だけでなく、歌や食文化にも触れながら学習できる授業であったため、とても意欲的に勉強に取り組むきっかけとなった。
教員が明るく熱心に授業を進行していたため、英会話を積極的にしやすいクラスが出来上がっていた。
韓国語を勉強したいなと思った
楽しく英語を学べました。学んだことを生かし、これからの英語学習に取り組みたいです。
内容は分かりやすかったです。韓国語はこれからも復習して、積極的に学びたいと思います。
英語を話す機会が増えて良かったです
実際に習った言語を用いて会話できてよかった
SDG s に関して興味を持つことができた
様々な活動があり面白かった
TOEIC 英語では、もう少し過去問にも取り組んでみたかった。
トイックは難しいという漠然としたイメージがあり不安だったが、受講したことによって問題の傾向が分かりトイック試験へのモチベーションが上がった。受講して良かったと思っている。
英語以外の言語を勉強するのが新鮮で楽しかったです。
先生がフレンドリーで授業も楽しかったです。

私も含め、同じクラスの学生たちの英語能力に応じた授業内容・進度だったため、非常に良かったと思う。
教科書を使って文法・単語を学ぶことに加え、先生のワンポイントアドバイスや中国でのエピソード等も聞くことができた。実用的かつ中国語学習に興味も持てるような授業内容で、非常に良かったと思う。
毎回の小テストで理解を積み重ねて文法を理解することができました。これからもスペイン語を勉強して，いつか話せるようになりたいと思いました。
クラスのみんなと英会話をたくさんできてよかったです。
英語はしんどいものだと思っていたけど楽しく英語を学べてよかったです
ワークを中心に行なっていて授業と復習を行うことで英語を理解することができた
中国語で会話することは難しかったけど授業はとても楽しかったです
クラスのみんなと英会話をたくさんできてよかったです。
自分よりはるかに英語が上手い人と授業を受けたことで、自分ももっと頑張らないといけないと思え、モチベーションが上がった。
実践英語が身についた。外国の方とも話せるようになった。
中国語が好きになった。いつか中国に行ってみたいと思うようになった。
文法などの基礎的な部分の内容を動画で moodle に公開していたので、一時停止してメモをとる、もう一度再生して確認するといったように、自分のペースでしっかり理解することができたので非常に良かった。
授業の進むスピードが適切で理解しやすかった。先生が要点となる部分を説明してから会話練習をするので、授業内容がスムーズに入り記憶に残りやすかった。
文法や発音の説明などが所々理解できないまま進んでしまうことがあった。
ドイツ語の勉強だけでなく、ドイツの文化についてもたくさん勉強ができ、非常にいい授業でした。
簡単すぎず難しすぎず、テスト期間などで他の教科に影響が出るようなことななくてよかったです。
先生が優しく、なんでも質問できました。

会話する時間が長く、良い英語の練習の場になったと思います。先生も優しく、良い雰囲気の授業でした。
熱心な先生でとても充実した授業だったと思う。聞き取れない箇所などはあったが、こちらの問題でもあるなと感じた。
優しく、とてもわかりやすい授業の仕方でとても満足している。
英会話のスキルを磨くことができ、とても楽しかったです。ありがとうございました
コミュニケーション能力の向上を実感した。
初めての学びで興味がそそられた。

FD

今年度は、2025 年 9 月 5 日（金）13:00-16:00 に於いて、東京外国語大学 Lingua Test Center（以下、LTC と表記）所属のマシュー・ミラー講師を招聘し、人文棟1階「交流ラウンジ」を会場とし、*Improving Language Teaching and Testing with a CEFR-J 'Can-Do' Focus*、すなわち外国語運用能力を総合的に測る CEFR-J "can-do" descriptors に基づいた外国語教育のあり方と能力テスト作成の問題に関するワークショップを実施した。本会では専任教員のみならず、非常勤講師を含んだ、外国語教員の参加者から、多くの刺激的な質問や議論が寄せられた。概要は以下のとおりである。本ワークショップでは、LTC で実施した CEFR-J×28 プロジェクト、28 言語に関して言語試験項目に基づいたテストバンクを開発した件について、まずは講師から説明がなされた。そのうえで LTC において CEFR-J の can-do に基づく言語評価をどのように実施しているか、またテスト結果がどのように分析・改訂されうるのかについて、会場にも問題提起がなされた。その後、参加者はチームに分かれて、基礎レベルの英会話授業を含む、言語レベルに応じたさまざまな英語スキルを測るテスト項目の作成の方法を練習した。ワークショップの最後には、CEFR-J が高知大学 EPIC プログラムでどのように総合的に使用されているかについて、より広範な議論が展開され、講師からは CEFR 評価の原則を EPIC カリキュラムに組み込むためのより具体的な方法が提案された。

また 2026 年 3 月 13 日（金）には 10：00-13:00 人文社会科学部棟 1 階の交流ラウンジに於いて、早稲田大学名誉教授藤井明彦氏を招聘し、FD 講演会「ドイツ語教育の半世紀――失敗から学ぶ」を開催した。藤井氏は早稲田大学文学部を拠点として、半世紀にわたってドイツ語史研究および教育に携わってこられた専門家である。同氏からは大学内のみならず NHK ラジオ講座など精力的に語学教育に携わってこられた豊富な経験を基にした実践的な語学教育の方法論について講演いただいた。後半部では同氏を囲みつつ、主に高知大学で語学教育に携わる出席者の先生方

を交えた形で、高等教育機関での外国語科目のあり方、より具体的にはシラバスの作成方法や教科書の選び方、試験問題の作り方など外国語教育に関する情報の共有や意見交換をする時間も設けられ、教員同士の交流という点においても貴重な機会であった。

今後もこのようなかたちで FD 講演会やワークショップを開催し、外国語関連科目の単位数の削減への対処や、授業時間外学修をどのように学生に取り組ませるか、効果的な課題や試験の作成、およびそのフィードバックの方法、シラバスの作成についてなどについて、さらに議論を重ねていきつつ、他大学との情報交換を行い、高知大学の教員が教授法をアップデートしていくためにも教員研修等を行っていく必要があるだろう。

以上

５　日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長
兼 FD 活動担当
大塚　薫（グローバル教育支援センター）
日本語・日本事情分科副会長（自己点検・自己評価活動担当）
渡辺　裕美（人文社会科学部）

＜活動の概要＞

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅱ」、「日本語Ⅲ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」が開講されている。

ここ数年、「日本事情」科目に比べ、「日本語」科目の受講者数が少なく、受講者数の偏りが見られた。新型コロナウイルス禍を経て特別聴講学生（短期交換留学生）の受入れが 2022 年 10 月から従来通りに再開したもののコロナ禍以前の水準には戻らないこともあり受講者数が軒並み減少したが、今年度は多少持ち直している。受講生からは「日本語」科目の授業が週 2 回の授業で 2 単位が取得できるのに対し、「日本事情」は週 1 回の授業で 2 単位の取得が可能なため、単位取得に際し、日本語科目の単位取得に多くの時間を割かなければならないことが指摘され、それが「日本語」科目が受講生に敬遠される一つの要因になっているようだ。

現在、共通教育の開講科目として、日本語Ⅰ～Ⅲは演習、日本事情Ⅰ～Ⅳは講義とそれぞれ設定されており、そのためか、日本語Ⅰ～Ⅲは週 2 回×16 週で 2 単位、一方、日本事情Ⅰ～Ⅳは週 1 回×16 週で 2 単位として設定されている。教授内容に違いがあるものの、単位数に響くほどのものではなく、単位数の認定が受講者数のアンバランスに影響しているのではないかと考えられる。

また、従来日本語・日本事情科目は「外国人留学生及び学則第 40 条第 2 項(外国において相当の期間中等教育を受けた者)に該当する学生のための科目」として定められ、正規生のための科目として開講されていた。近年は、特別聴講学生(短期交換留学生)の受講が増加し、2020 年度から 3 年にわたるコロナ禍においては事情が異なったが、2010 年度以降は日本語科目においては非正規生の受講が受講生の 8 割以上を占めている場合もあった。特別聴講学生は、母国で日本語・日本文化を専門として勉強している学生であり、高度な日本語力を有している。

日本語科目において履修学生に求められている日本語力は、日本語能力試験 N1 レベル(上級レベル)相当の能力であり、他の外国語で定めている基準より高く設定されている。実際に、履修している外国人留学生は、正規生及び特別聴講学生ともに本学で専門科目を日本人学生とともに学習している学生であり、上級レベルの日本語力を有してい

るため、日本現地で学習するという環境に加え、週１回の授業でも十分な学習効果が期待できる。さらに、週２回の受講の縛りをなくすことにより、外国人留学生は授業の選択の自由度が増え、より多くの教員の授業を受講することが可能になると考えられる。

以上の問題点を踏まえ、外国人留学生が週１回でも日本語科目が取れるようになることは検討すべき今後の課題である。

１.カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文社会科学部の教員は日本事情科目を、グローバル教育支援センターの教員は日本語科目を担当した。科目構成は、日本語科目については日本語教育専門のグローバル教育支援センターの専任教員１名が 2019 年度末で退官しその後補充がなかったため、2019 年度当初から１科目減少し日本語Ⅰ～Ⅲが開講されている。2024 年度末にもグローバル教育支援センターの専任教員１名が退官したが、非常勤講師が日本語科目を２科目担当し現状維持のまま開講することになった。日本事情科目については２名の人文社会科学部の教員で日本事情Ⅰ～Ⅳを実施した。

また、2025 年度の開講基本コマ数、担当体制については、面談やメール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

２.自己点検・自己評価活動＆FD 活動

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケート調査を全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。 また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めている。

2025 年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検活動及び FD 活動を連動させた活動を行ってきている。具体的な活動としては、日本語Ⅲの授業内で学生によるレビュー活動を実施するとともに日本語Ⅲ、日本事情Ⅲ・Ⅳでは、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全７科目を４名の教員で担当して行っている上、今回のレビュー活動並びに独自の授業アンケート調査を実施した科目は限られ、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。また、オンライン授業やアクティブラーニングに関する FD 研修を個人ベースで受講し、授業のさらなる改善に努めた。

その他、自己点検・自己評価活動として 2026 年度の日本語・日本事情科目を担当する教員のシラバスを確認し、教育の内部質保証として学生にとってより分かりやすい内容のシラバスになるよう修正を行った。

３．その他

新たな授業の開発としては、日本語・日本事情分科会で開講している科目内で今般の多文化共生社会における最新の日本文化の理解や文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育も展開した。また、日本語Ⅲの授業内で地域の高校生に対して留学生が自文化を紹介した上で日本文化との違いに関して交流しながら話し合ったり、交流授業として受講生に加え学内の日本人学生と協定校の学生とをインターネットで繋ぎ、ピア・ラーニング活動を行ったりし、新たな授業方法の開発にも努めた。

2026 年度以降も購入した書籍の内容を踏まえて、留学生の体験型学習や日本における就職時に必要なビジネス日本語教育、対面教育とオンライン教育を並行して実施するハイブリッド型教育を日本語・日本事情科目内で取り入れ、留学生のニーズに応えていきたいと考えている。

また、第 72 回中国・四国地区大学教育研究会において日本語・日本事情分科会に参加し、遠隔ピア・ラーニングによる学習者主体のキャリア形成教育授業について具体的な授業内容や特徴的な取り組みによる教育効果についての事例を紹介し中国・四国地区の日本語教員と日本語、日本事情教育と総合知の接点をめぐって協議を行った。

６　医療・健康・スポーツ分科会

分科会長　神門大輔（教育学部）

【カリキュラム】

令和 7 年度の履修者総数は 1,804 名であり、そのうち実技系科目は 316 名であった。次年度（令和 8 年度）の開講科目数は、本年度（令和 7 年度）と同等とすることが決定されている。70 歳を超える非常勤講師 1 名の退職に伴い、新規に 1 名の雇用を進め、令和 8 年度より担当いただけることとなった。なお、70 歳を超える非常勤講師がもう 1 名在籍しており、今後も授業担当体制の検討が必要であると考えられる。一方で、高知県内では非常勤講師として担当可能な人材が非常に限られているため、今後も体制についても課題が残されている。

また、安定した授業運営を継続していくためには、将来的な人材確保と計画的な世代交代が不可欠である。特に実技系科目では専門性や安全管理の観点から指導経験を有する人材が求められるため、若手教員や指導者の確保に向けた取組が重要となる。今後は学内外との連携を強化し、中長期的な視点で人材確保の仕組みづくりを検討しながら、持続可能な授業体制の構築を進めていく必要がある。状況によっては、授業科目数の見直しも含めた対応を検討する必要がある。

新規採用に伴う担当科目については、木曜 3 限に実施していた授業を次年度から月曜 3 限へ移動することとなった。この変更に際しては、教育学部幼児教育コースの学生への配慮が課題となった。幼児教育コースではスポーツ科学実技が必修科目であり、時間割の都合上、木曜 3 限は履修しやすい時間帯であった。月曜 3 限では履修が難しくなるが、他にもスポーツ科学実技の履修選択肢があることから、幼児教育コースの先生方の内諾を得ることができた。今後は、非常勤講師のスケジュールも踏まえつつ、幼児教育コースの学生の選択肢が広がる時間割編成についても検討していく必要がある。

【自己点検・自己評価】

副分科会長（自己点検・自己評価担当）
吉村澄佳（医学部）

1．令和 7 年度「健康」

「健康」の授業は 4 クラスで開講し，授業後に履修学生を対象に，学部，学年，授業評価項目，感想(自由記載)の授業評価調査を実施した．回答者 56 名であった．

1）回答者の特徴

回答者の特徴を示す（右表）．回答数はクラス別に A：0 名，B：14 名，C：24 名，D：18 名であった．回答者は 1 年生が最も多く 29 名であった．

表 学部別・クラス別の回答者数

		A	B	C	D
総回答者数		0	14	24	18
学部	人文	0	3	12	1
	教育	0	0	1	1
	理工	0	2	2	6
	農	0	2	2	4
	地域協働	0	0	1	3
	医	0	7	6	3
	TSP	0	0	0	0

2）クラス別授業評価 14 項目の結果

評価指標 16 項目のうち，健康に関する質問項目 14 項目の結果をクラス別に示す（右図）．各クラスの結果は、項目 9（授業の予習・復習をする）以外は結果に大きな差はなく，教員の授業への取り組み，学生の授業への関心等の評価が高かった．

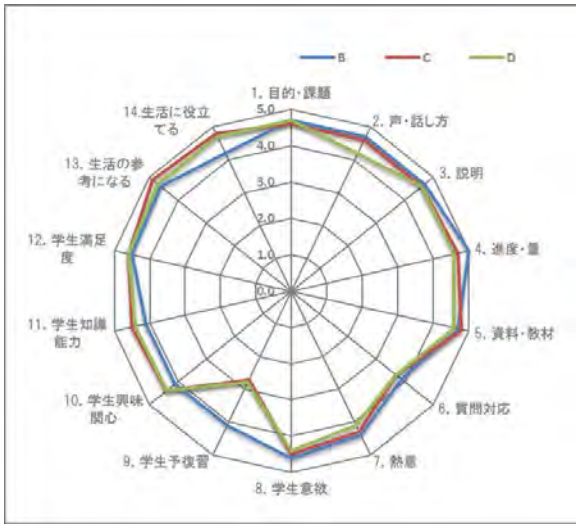


図 クラス別による授業評価 14 項目の得点結果

3）自由記載のまとめ

自由記載への回答では，心と体の健康について自身の生活と結び付けて学ぶことができる内容であり理解しやすかったとの回答が多かった．更に学びから，自身の生活を振り返り改善に取り組むなどの記載から，今後の生活に活かせる有意義な授業であったと推察する．また，講義内容が多彩であるため健康を体系的に学ぶことができたという回答があった．

4）まとめ

「健康」は多様な分野から講義が構成されており，学生の健康に対する意識を高め，健康のための予防行動や対処行動を身につけることができる貴重な時間である．大学生活を始めて健康への関心が高まっている受講生にとっては，例年オムニバス形式で行われる本授業の関心は高い．しかし，回答者が少ないことから，講義内容に関心のあった受講生が回答した可能性も高く，授業評価を次年度に活用するためにはアンケートにより受講生の声を積極的に集める働きかけが必要である．

【FD】

医療・スポーツ分科会 FD 活動報告
（スポーツ科学実技：フットサル）

副分科会長（FD 担当）
矢野宏光（教育学部）

1. はじめに

本報告書は、共通教育科目「スポーツ科学実技（フットサル）」を対象として実施した FD 活動について、その概要および教育的意義を整理・報告するものである。

1-1　授業科目の特徴

本科目は、生涯スポーツとしてのフットサルを、多様な背景をもつ学生が学び合いながら実践することを目的とした実技科目であり、リーグ戦形式を中心とした授業構成が特徴である。

1-2　FD 活動の目的

本 FD 活動は、実際の授業場面を参観し、授業設計・運営方法、学生の学習過程および教育効果について検討することを目的として実施した。

2. FD 実施概要

FD 実施日は 2025 年 11 月 27 日（木）3 時限目、実施場所は高知大学サッカーグラウンドであった。FD 参加者は体育系教員 2 名であり、授業を通して観察・意見交換を行った。対象とした授業は、共通教育におけるスポーツ科学実技科目の一つであり、未経験者・初心者・経験者が混在するクラス編成のもと、男女を問わず履修可能な実技授業として実施されている。

3. 授業の構成と実施内容

当日の授業は、ウォーミングアップの後、「本時のゲームにおけるチーム目標」および「各自の個人目標」を学生間で共有することから開始された。その後、リーグ戦形式によるゲームが展開され、1 試合 5 分という短時間設定のもと、授業時間内に各チームが約 30 分程度の実質的な活動量を確保できるよう工夫されていた。

リーグ戦形式を採用することで、待ち時間を最小限に抑えつつ、継続的な試合経験を積むことが可能となっており、体力的負荷と技能学習のバランスが適切に保たれている点が確認された。

4. 多様性への配慮と授業活性化の工夫

本授業において特筆すべき点として、実力差や体力差への配慮を目的としたルールの工夫が挙げられる。具体的には、任意の学生（例えば、女子学生）がシュートを決めた場合に 2 点が加算される「ポイントゲッターシステム」が導入されており、これにより男女混成チーム内での役割分担の固定化を防

ぎ、全員が積極的に攻撃参加する環境が整えられていた。このルール設定は、単なる競技上の配慮にとどまらず、ジェンダー平等や協働的学習の観点からも教育的意義が大きく、授業全体の活性化に寄与していると評価できる。

5. 振り返りミーティングと学習プロセス

各試合終了後には、チームごとに作戦会議を含む「振り返りミーティング」が実施されていた。この時間では、ゲーム中に生じた課題や成功事例について学生自身が言語化し、次の試合に向けた改善点を共有する様子が観察された。

このような取り組みにより、授業内には、①目標設定（Plan)、②実践（Do)、③振り返り（Check)、④改善への反映（Act）という PDCA サイクルが自然な形で組み込まれていた。学生は競技技能の向上のみならず、集団での課題解決や意思決定のプロセスを体験的に学んでおり、これらは大学での学びにとどまらず、今後の学生生活や社会人生活にも応用可能な汎用的能力の育成につながるものと考えられる。

6. FD としての総合評価

本授業は、シラバスに示された「多様なメンバーが学び合いながらリーグ戦を楽しむ」という教育目標に沿って、授業内容および方法が一貫して設計・運営されていた。活動量の確保、ルールの工夫、振り返りの体系化といった要素は、スポーツ科学実技における教育効果を高める優れた実践例である。

以上より、本 FD 活動を通して、本授業はシスティマティックに工夫された教育的価値の高い実技授業であることが認められた。今後は、本授業で得られた知見を他の実技科目や共通教育全体へと共有することにより、大学における実技教育の質的向上につながることが期待される。

７　キャリア形成分科会

キャリア形成分科会長　斉藤　雅洋（地域協働学部）

１．キャリア形成分科会の目標

キャリア形成科目のカリキュラム編成とシラバス点検を行うことによって、学生のキャリア形成科目の授業の円滑な実施に寄与する。

２．分科会活動の報告

（１）カリキュラム編成

11 月～12 月上旬にかけて、教職委員会、資格教育委員会、SUIJI 推進室、**学務課全学・共通教育係**と分担し、次年度のキャリア形成科目のカリキュラム編成を実施した。授業担当教員に対する次年度開講の形態や時限・曜日等の確認作業の依頼を行い、内容に変更・修正等がないことを確認した。

（２）自己点検・評価活動

2 月下旬から 3 月にかけて、副分科会長（自己点検・自己評価部会）を中心にキャリア形成科目のシラバスの点検を行った。「シラバスチェック項目」にそって点検を行い、問題なく記入されていることを確認した。

（３）ＦＤ活動

キャリア形成分科会単独でのＦＤは行わず、必要に応じて関連する他分科会等のＦＤに参加することを基本方針とした。本年度のＦＤへの参加実績はなかった。

（４）その他

特になし

８　芸術分科会

令和７年度 共通教育 芸術分科会 活動報告

芸術分科会長　高橋美樹（教育学部）

次年度（令和８年度）に向けたカリキュラム編成

共通教育実施委員会において、次年度の担当コマ数案が提示され、芸術分科会は計６コマ（専任教員５コマ、非常勤講師１コマ）を担当することが確認・承認された。この決定を受けて分科会を開催し、カリキュラム編成を行った。新規科目として毎年開講したいという教員がいたため、従来のローテーションを見直し、分科会長より修正案を提案した。その後、新規科目申請者から補足説明があり、修正案が承認された。最終的に、毎年開講する２コマ、ローテーションにより開講する４コマ、合計６コマを開講科目案(授業題目表)として、作成・確定することができた。

また、今後のカリキュラム編成における課題として、今後非常勤講師（謝金なし）の配置が困難な場合、その分のコマ数を減じることを、カリキュラム等編成部会において継続的に確認する必要がある。

FD 部会について（担当：野角孝一）

主旨

昨年度までは授業アンケートの集計を行うかたちで FD を行ってきたが、今年度の芸術分科会の FD として、初めて演奏会および展覧会を中心とした活動を企画した。

芸術分科会は、音楽と美術の分野に分けられるが、音楽は音楽、美術は美術といったようにそれぞれの活動についてよく知らないのが現状である。

新カリキュラムにおいて「生きる力を育む科目」に位置づく芸術分科会が、共通教育の中でより実践的に機能するために、学内の芸術系教職員の作品や演奏、研究内容を広く公開し、芸術文化の向上に資する作品展・演奏会を FD 活動として行った。鑑賞内容のアンケート結果を基にした分析を通して、授業改善や内部質保証に積極的に取り組みたい。

対象となる演奏会および展覧会

【演奏会】ご担当：大山先生　題名：「あさくらシック！Vol.1　ウヴェ・コミシュケ氏を迎えて」日時：2025 年 10 月 19 日(日)14:00～15:30

【展覧会】担当：美術教員　題名：Art Research Exhibition

会期：2025 年 11 月 1 日（土）～11 月 25 日（火）

【演奏会】ご担当：梶原先生　題名：ファミリーコンサート

日時：2025 年 12 月 21 日(日) 10:30～11:30

アンケートの対象

共通教育(芸術分野)に所属する教員に Forms によるアンケート形式で 8 名から回答を得た。

Forms による質問の内容

1.【音楽の先生方のみ回答】普段から展覧会を鑑賞する機会はありますか？（学内外を問いません）

2.【美術の先生方のみ回答】普段から演奏会を鑑賞する機会はありますか？（学内外と問いません）

3.【全員回答】今回の FD を通して、演奏会および展覧会を鑑賞し、その理解を深めることができましたか？

4.【音楽の先生方のみ回答】これからも展覧会を鑑賞したと思いましたか？

5.【美術の先生方のみ回答】これからも演奏会を鑑賞したと思いましたか？

6.演奏会および展覧会を鑑賞して、思ったことを自由に書いてください。

アンケートの集計

質問１から、音楽の教員が展覧会を鑑賞する頻度については、3 名が 1 年間に３～4 回と回答しており、これが平均となっている。また、1 名が 1 年間に１～２回、の頻度と回答している。今回の FD とは関係なく、教員が必ず通る教育学部 1 号館エントランスにおいて美術の教員が年間１・2 回は展覧会を開催しており、おそらくこれが鑑賞の機会と推察される。

このことから慌ただしい教員の普段の生活において、鑑賞する機会は少ないことが指摘できる。

質問 2 から、美術の教員が演奏会を鑑賞する頻度については、3 名が 1 年間に３～4 回と回答しており、これが平均となっている。また、1 名が 1 年間に 5 回以上の鑑賞している。街頭等で演奏している場面に遭遇することはあるが、基本的に演奏会を鑑賞する意図がなければ、鑑賞する機会はなく、美術の教員が積極的に演奏会の鑑賞を行っていることが指摘できる。

質問 3 から、5 名が「とても理解を深めることができた」、3 名が「やや理解を深めることができた」と回答していることから、FD を通して、従来と比較して理解が深まったことが示唆できる。

質問４および５から、展覧会や演奏会についてこれからも鑑賞したいという質問に対して、7 名が「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答しており、肯定的な回答が得られた。

質問６については、「演奏のみならず、先生方のお話を聴かせていただいたり、質問に答えてくださったりと、対話の機会を設けられていたことに教育学部ならではの観点を感じました。」「指揮者体験はとても有意義で貴重な体験ですし、なにより指揮をする子供達を見守る保護者や観客のあたたかい豊かな空間が素敵でした。」「制作・教育・研

究の関係性についてのそれぞれの回答が試みられ興味深く、勉強になりました。」「奏者と鑑賞者が一体となるような楽しい時間を頂いたように思う。子どもたちの喜びに満ちた表情が印象に残りました。」など、参加することで得られた印象や魅力が肯定的に回答されていた。

まとめ

音楽と美術ではそれぞれの分野についてよく知らないという前提で FD を開催したが、今回の FD を通してこれまで気づいていなかった両者の魅力を再確認できたことが見て取れた。自由記述には「せっかくですので会期中にアーティスト・トーク等の機会を設けたりするのは如何でしょうか？昨今の学生の傾向として、自ら体験の機会を求めることが減っており、理解の深化にもつながりますし、教育的意義を一層高められそうな気がします。」「普段お会いする機会の少ない先生も、作品を通して個が見えてくるようでした。空き時間に立ち寄って鑑賞できるのも有難く、是非これからも継続開催していただきたいです。」「今回は、演奏会・展覧会それぞれでの実施でしたが、今後可能であれば音楽と美術のセッション（生演奏と造形制作のライブセッション/音楽 CD による BGM が流れる展覧会/など）ができれば更に面白いと感じます。」などがあり、両者のことをより知りたい、知る機会がありがたいという意見があった。

何かを創る音楽や美術の教員であるからこそ、作品や演奏という側面を通して理解する重要性が浮き彫りとなった。今回は教員主体の演奏会や展覧会であったが、今後は共通教育の授業を受講する学生が主役となるような演奏会や展覧会を開催し、学生同士あるいは教員と意見交換できる機会の創出を図りたい。

自己点検・自己評価部会について（担当：前田克治）

第 1 回自己点検・自己評価部会で決定した点検内容を基に、共通教育教養科目群「芸術」（芸術分科会）のシラバスチェックを行った。該当は、美術系 3 科目、音楽系 3 科目の計 6 科目である。項目別では、「オフィスアワー・学生相談場所」の研究室の具体的場所が未記載のもの 2 件、「授業形態」（新規）についてチェックがないもの 1 件となっていたが、概ね丁寧に記載されてあった。また、「この授業と SDG s との関連」（新規）について選択されているのは 1 件のみであったが、分野の特性にも起因しているように思われる。関連付けが困難な場合は空白でも可のため、修正は各教員に委ねることにした。全体としては、学生にとって分かりやすく記載されており、評価できる内容であると言える。

９　人文科学系領域分科会

人文科学系領域分科会　カリキュラム編成に関する報告

人文科学系領域分科会長　渡邊ひとみ（人文社会科学部）

１）次年度（令和 8 年度）に向けたカリキュラム編成

共通教育実施委員会において承認決定された開講科目数に基づき，令和 8 年度は人文社会科学部から 9 コマ，教育学部から 3 コマを開講する運びとなった（計 12 コマ；センター教員等を除く）。本分科会が目指す教育目標（豊かな人間性と高度な専門性を備えた人材の育成）及び分野の多様性を考慮しながら開講科目の選定を行った。また，教員数の推移を踏まえ，人文社会科学部と教育学部の間で「来年度以降の開講コマ数」についての活発な議論も行い，本分科会の今後の方針や担当体制についての見直しを行った。

２）他部会との連携を重視したカリキュラム編成

本分科会では，昨年度より，「カリキュラム編成と他部会活動との連携」を重視した分科会運営を目指してきた。つまり，カリキュラム等編成部会や FD 部会，また自己点検・自己評価部会が連携をとり合いながら，より質の高い，多様性豊かな授業科目を提供することを目指してきた。昨年度は，その一環として，「図書を活用した教材開発」と題する FD 活動を実施し，分科会全体で授業改善に取り組んだ。しかし，1 学期に開講された科目については，（活動計画案が承認された時期の関係で）講義内容に FD 活動の成果を反映させることができなかった。そこで，昨年度からの FD 活動を今年度も継続し，さらに「図書」だけでなく「教具」もその対象とした上で，「図書や教具を活用した教材開発・授業改善」を実施した。昨年度及び今年度の FD 活動の成果を授業に反映させることで，授業の質の全体的な底上げや多様性に富むカリキュラム編成につなげることができたと考えられる。また，自己点検・自己評価部会では，授業の質保証の観点から「公正な成績評価」がなされているかどうかを分析・確認する作業を毎年行っており，今年度も客観的指標からの授業改善を実施した。今後も，各部会での活動やその効果をカリキュラム編成に直接反映させることで，学生にとっても，また担当教員にとってもメリットのある教育の場をつくっていく必要がある。

３）総括

今年度は，分科会構成員の先生方のご協力もあり，予定していた科目をすべて無事に開講することができた。また，来年度（R8 年度）の開講科目を確定することもできた。来年度以降のカリキュラム編成では，教員数の推移や各科目の受講生数（学生のニーズ），また分科会内での学部間連携も重視しながら，質の高い授業の提供を維持できるよう努める。

２０２５年度　人文科学系領域分科会
副分科会長（自己点検・自己評価部会）　川本真浩（人文社会科学部）

昨年度に引き続き、本年度も公正な成績評価と授業の質保証について検討することにより、分科会での自己点検・自己評価作業をおこなう。

学士課程運営委員会「公正な成績評価の実施に向けて（申合せ）」では、「優以上の成績を修める学生の比率は，半分以下を標準とする」という目安が設けられている。令和 7 年度に開講した人文科学系領域の授業は 20 科目であった。全学・共通教育係から提供された資料をもとに確認した結果、上記 20 科目のうち、優以上の成績を修める学生の比率が半分を超えた授業は 2 科目であった。

このことから、全体の 9 割にあたる授業が「申合せ」に示された目安の範囲内におさまる成績評価を行っていたことがわかる。まずは、人文科学系領域に属する授業ではおおかた「申合せ」にそった成績評価がおこなわれていることが確認できた。

また、目安の範囲内におさまらなかった 2 科目について、当該授業担当者から、その「理由」及び授業の質保証に関する「工夫」について、聞き取りをおこなった。以下、その結果を簡単にまとめる。

〔事例①〕【理由／工夫（あわせて）】

授業中の教員と学生の双方向のやりとりまたは学生同士のディスカッションなどで適切に学生たちの学びを深める取組をおこなう授業形式を採っている。また、実物による教授でもって講義内容の理解をより深める工夫をしている。したがって、出席日数等で問題がない限り、受講生の評価は高くなる。

〔事例②〕については、諸般の事情により本文書作成までに聞き取りをおこなうことができなかった。参考までに、昨年度の回答に拠ると、
【理由】登録した学生の大半は勉強に熱心に取り組み、それが成績に反映された。
【工夫】総括的な成績評価ではなく、形成的な成績評価システムを採用している。学生は毎週課題を提出し、それに対して成績評価を行う。さらに学生は最終レポートも書かなければならない。従って、学生はコースを修了するために、比較的多くの採点付き課題をこなさなければならない。
である。担当・実施体制に変更はないので、今年度も同様に相応の理由なり授業実施の工夫がなされるなりしたものと推察される。

以上のことから、「優以上の成績を修める学生の比率が半分を超えた授業」についても、質保証のために工夫を凝らした取り組みがおこなわれたり、評価に関して適切に配慮された手法がとられたりしていること（その蓋然性）が認められる。そうした実践の結果として高評価を得る受講生の比率が高くなることは、授業のあり方として望ましいこととも言える。

今後も分科会においてこのような実践事例を共有することにより、授業実施方法や評価方法についての経験と実績を共有していくことが肝要であると考える。

人文科学系領域分科会　FD に関する報告

人文科学系領域副分科会長　佐竹泰和（教育学部）

コロナ禍以降、本分科会では、オンラインツールの活用などの授業改善に関する FD を重ねてきた。昨年度は、「図書を活用した教材開発と授業改善」をテーマに、基本である教材づくりについて活動を進めた。ある程度の成果を挙げることができたものの、図書に限定していたため、教材開発の広がりに欠けた。そこで令和 7 年度は、昨年度の図書に限らず教具の活用などより幅をもたせた教材開発と授業改善を目指した。そのために、人文科学系領域分科会に関係する教員を対象に図書や教具等を活用した教材開発を依頼し、その後、教材開発および授業改善に関するアンケート調査を行った。その結果を紙面にまとめてオンライン上で情報交換会を実施することで、教材開発と授業改善の FD を進めた。

本分科会には、さまざまな分野の教員が関わっていることから、昨年度と同様に、教材開発について決まった方法は設けず、教材開発は各自の裁量で行うこととした。アンケートでは、教材開発とその成果（授業やシラバス改善）や今後に向けた考え等を収集・共有した。

１．教材の作成や図書・教具の活用、授業ツールの導入。

２．今後の教材開発や授業計画について考えていること。

本 FD の成果として、まず１点目の教材開発について、最新の研究成果を取り入れた授業展開が進んだことが本 FD の成果として挙げられる。具体的には、「最新の研究成果をとりいれつつ他分野に関心のある学生や基礎知識の乏しい学生をも意識して、初学者向けの良質な図書」の入手・活用、「当該学問分野・テーマに関連する図像資料を充実」させるなどの取り組みがあった。さらに、インターネット上の資料も組み合わせて活用する回答がみられた。このように、過去の FD（オンラインツールの活用、図書の活用など）の成果も合わさって、よりよい教材開発につながったといえる。

次に２点目の今後の教材開発について、これまでに作成した教材や現状の授業方法を活かしつつ、オンラインツールの活用や生成 AI への対応についての考えがうかがえた。具体的には、「オンライン授業の利点を活かした方法を模索していきたい」、「受講生に生成 AI をどう使わせるか、考え中」、「授業のテーマは変えることはないと思うので、それに相応しい素材をたくさん集めて、より面白い授業を作りたい」などである。

本分科会では、関係の教員の専門分野が多岐にわたり、かつ授業形態もさまざまであるため、成果を端的にまとめることは難しい。しかしながら、本活動に対し、関係者からは「授業内容を見直したり、実際に改善する機会はあるようでない」、「教材購入費の補助や他の先生方による工夫の様子がわかる FD はたいへんありがたい」など積極的な感想が寄せられた。このように、これらの FD は一定以上の成果を挙げることができた。人文科学系領域分科会では今後も活発な FD 活動に取り組んでいきたい。

以上

10　生活・社会科学系領域分科会

生活・社会科学系領域分科会長　小川寛貴（人文社会科学部）

◆カリキュラム編成

カリキュラム編成の経過（令和 7 年 10 月～令和 8 年 1 月）

全開講数 26 コマの内訳として、人文 11、教育 3、地域協働 12 と決定した。生活・社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部に次年度担当体制について依頼し、担当者および時間割を調整・決定した。各学部等の協力を得て多様な科目のカリキュラムを編成できた。

◆ 自己点検・評価活動（令和 8 年 2 月～3 月）

次年度シラバスチェックを実施中である（令和 8 年 3 月 9 日時点）。1 回目のシラバスチェックを 2 月下旬から 3 月上旬、2 回目を 3 月中旬に行っている。

◆ＦＤ活動

令和 7 年度は独自の FD 企画は行わず、必要に応じて他分科会などの FD に参加した。

11　自然科学系領域分科会

自然科学系領域分科会長
藤代　史（理工学部）

1. 自然科学系領域分科会の運営体制

本年度の自然科学系領域分科会の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識、方法および思考法を習得し、それらを基盤とした自発的な探求力、深い洞察力および論理的な思考力を育成する」ことである。これを実現するために、FDや自己点検評価活動とも連動して、カリキュラム等編成およびシラバスチェックを行った。なお、分科会委員への情報周知や協議・作業依頼に関しては、原則としてメール会議で実施した。

本年度の自然分野分科会は次に示す7名の委員で構成される。FD担当の分科会副会長には教育学部の加納理成委員が、自己点検評価担当の分科会副会長には農林海洋学部の井原賢委員がそれぞれ選出された。

【自然分野分科会委員】

分科会会長：藤代史、分科会副会長（FD 担当）：加納理成、分科会副会長（自己点検評価担当）：井原賢、その他の委員：伊谷行（教育学部）、関安孝（医学部）、島村智子・西尾嘉朗（農林海洋科学部）

2. 令和８年度カリキュラム等編成

カリキュラム編成作業は、おおよそ下記の流れで行われた。第1回カリキュラム等編成部会（7月7日開催）において、“令和7年度の開講コマ数“が示され、当分科会担当分の内訳は、学部担当分 29、センター等担当分 6、知プラ科目 25 の計 60 コマであった。その後、第3回共通教育実施委員会（11月7日開催）での審議・報告を経て、改めて分科会に令和8年度開講科目数等を調整するよう依頼があった。このうち学部担当科目について、分科会長・副会長を通じて各学部に問い合わせたところ、担当教員の退職に伴う開講科目名の変更や担当教員交代による授業科目の変更の連絡があった。また、センター等教員の担当分は学務課全学・共通教育係から授業担当者に直接確認を行っていただいた。これらにより、開講科目の内訳は、学部担当分 30、センター等担当分 6、知プラ科目 24 の計 61 となった。この担当体制に基づき令和8年度のカリキュラム等編成作業を開始した。各科目の担当教員・開講時限等について、学部担当科目については分科会長・副会長を通じて、センター等教員が担当する科目は全学・共通教育係から、それぞれ連絡し確認作業を行った。このようにして編成された科目は第3回カリキュラム編成部会（1月15日開催）に提出され、原案どおり承認された。なお、本年度からの主な変更点は以下の通りである。

【新規】

・物質の科学 I

・物質の科学 II

【廃止】

・物質の科学（退職者担当分を考慮して、上記『物質の科学 I, -II』(各1単位)に変更した）

【交代】

・細胞構造と代謝　→　花粉を科学する

3. 自己点検・自己評価

内部質保証体制の構築に関連して、昨年度に引き続いてシラバスチェックを自己点検・自己評価担当の副分科会長（井原）が中心となって実施した。シラバスチェックは、分科会長・副会長がそれぞれの学部を担当し、当人が開講している科目については他の委員がチェックした。センター等担当科目については、分科会長（藤代）が担当した。

4. FD 活動

自己点検・自己評価の項にあるような内部質保証体制の構築について委員間で意見交換を行った。なお、本年度は自然分野分科会として独自の FD 講演会などは開催しなかった。

5. その他

特になし。

12　複合領域分科会

分科会長　福間 慶明（理工学部）

― カリキュラム編成活動 ―

1. 複合領域について

AI の進展とこれによる社会産業構造の変化、人口急減・超高齢化、グローバル化の進展といった社会状況の急速な変化が進む現代社会において、単独あるいは少数の専門分野の知による課題の発見・解決がますます困難になってきている。そのような状況を受けて「複合領域」分野は、特定の領域に寄っていない、従来の枠を越えた「テーマ型」「文理横断／融合型」の学びの機会として、令和 6 年度に新設された区分である。この区分を扱う組織である「複合領域分科会」においては、特に「文理横断・文理融合の学び」を通して「文理複眼の視点」を養い、分野を越えた幅広い教養を身に付け、活用できるようになることを目指したいと考えている。そのために授業においては受講生同士の意見交換やグループワークの機会を設けることで分野を越えた学びを深めるとともに、基礎的能力である「自ら課題を発見し解決する力や他者とコミュニケーションできる力、そして自身の考えを主張し表現する力」も涵養する。

2. 令和 7 年度カリキュラム編成活動に関する総括

各授業担当者に授業実施を依頼し、昨年度 10 題目であった複合領域分野授業題目は、今年度 13 題目（4 題目新規開講、1 題目閉講）を開講した。具体的な開講科目は以下の通り：

「現代社会の諸問題」、「高知の人と企業を知る」(2 単位)、
「高知の人と企業を知る」(1 単位)、「土佐の海の環境学Ⅰ：柏島の海から考える」、
「障害者支援の理論と実践」、「国際協働入門」、「地域防災入門」、「自由探求学習」、
「学びを創る」、「「学問は愉しい」を実感する」、「文系学問と AI」、
「社会問題・環境問題を構造化する～シリアスゲーム制作～」、
「「こども主体のまちづくり」を学ぶ～こうちこどもファンド～」

また、「文理横断・文理融合の学び」や教養教育にかかわるカリキュラムに関係する書籍、そして教養教育における具体的な学びの内容に関係する書籍を購入して、「文理横断・文理融合の学び」に関する情報収集をおこない、その内容を確認した。その結果、今後の複合領域科目の在り方についての検討が必要であるという考えに至った。

3. 令和 8 年度以降の取組について

現時点で、「文理横断・文理融合の学び」を実現できる場として考えられるのは共通教育で

あり、その共通教育において「文理横断・文理融合の学び」の核となるべき分科会が複合領域であると考えている。「文理横断・文理融合の学び」を通して、社会に出た際に必要となる力を育成するには、単発の授業の履修だけでは困難であり、大学在学中の 4 年間を通して継続する学びが必要であると考えている。それを実現するためには検討しなければならないことが多く、時間を要することが想定される。引き続き様々な情報を得つつも効果的な「文理横断・文理融合の学び」の実現に向けてカリキュラム編成を含めた様々な検討を行い、実施に向けて確実に前進していきたい。

― 自己点検・自己評価活動 ―

副分科会長　高橋　俊（人文社会科学部）

今年度、主な活動は２点である。

１．授業評価

今年度は分科会では特にまとまった授業評価は行わなかったが、それぞれの授業で的確に授業評価が行われた。次年度は、分科会全体でのまとまった評価システムを確立させたい。

２．シラバスチェック

シラバスチェックを的確に行った。すでに３年目ということもあって、特に修正が求められるものはなかった。

次年度は、さらに充実した活動を行っていきたい。

以上

― FD 活動 ―

副分科会長 俣野 秀典（地域協働学部）
分科会長　福間 慶明（理工学部）

まず、今年度の活動計画に記載されていた以下の項目について報告する。

1. 複合領域分科会または担当者間の意見交換
2. SPOD フォーラム（8 月開催）への参加
3. 全学 FD フォーラム（10 月開催）への参加

項目 2･3 に関しては、各イベントへの参加が確認された。SPOD フォーラムでは、「分野横断・分野融合の学びの価値とカリキュラム設計を考えよう！」というプログラムに複合領域分科会長が参加してワークに取り組むなどの活動を行った。また、今年度の全学 FD フォーラムはキャリア開発に関する内容であったが、「ライフキャリア」という文脈から生じる「生涯学び続ける」ことの必要性という観点から見ると、「分野横断の学び」は、「興味の広がり」や「キャリアの選択肢の拡大」を生み出すことから、学び続ける動機を強くすることにもつながるため、全学 FD フォーラムに参加することにより分野横断的な学びが大切であることを改めて認識することができた。

項目 1 に関しては実質的な意見交換は行われなかったものの、Teams 内に立ち上げたチーム「共通教育複合領域分科会」において複合領域分科会長が参加したイベントなどの情報共有を行い、それに対する意見等を述べる機会を作った。具体的には、他大学における「分野横断・文理融合の学び」に関するものであり、以下のイベントである：

- 「第 72 回中国・四国地区大学教育研究会」（令和 7 年 6 月 14 日、島根大学、オンライン）
- 「内閣府総合知ワークショップ＠岡山大学」（令和 7 年 9 月 22 日、岡山大学、オンライン）
- 「学士課程の共通教育に求められるコンセプトと設計～金沢大学共通教育改革を中心に～」（令和 7 年 10 月 21 日、金沢大学、オンライン）

どのイベントも、今後の「分野横断・文理融合の学び」を考えるうえで参考となるものであった。

次に、上記以外の FD 活動に関連する事項について述べる。

FD 関連のイベントへの参加者数はあまり多くはないが、担当者それぞれが自身の授業で「授業改善アクションプラン」に取り組んでいる。なお、「スチューデント・フィードバック」の本年度の実施は確認されていない。

春季 FD セミナーとして実施される「ファシリテーション研修」は、複合領域科目や課題探求実践セミナーをはじめとしたアクティブ･ラーニング系科目における教育力向上を意図されており、担当者の参加が少数にとどまっていることは課題といえる。

当初想定していたセミナーの他に、大学授業入門（4 月開催）・グループワークのはじ

め方（4・10 月開催）・新任教員のためのリフレクションセミナー（2 月開催）・学生の主体的な学習を促す非同期型オンライン授業（2 月開催）への参加もあった。

複合領域の多くの科目は、教員が教え込む授業ではなくグループワーク型の授業であることから、OJT-FD 教員の参加および受け入れが最も有効な FD 活動の一つであると考えられる。来年度も引き続き、「自由探求学習」「学びを創る」などの授業への受け入れを通して、学生の変容とファシリテーターとしての教員の役割を体感・体得できるように取り組んでいきたい。また、「グループワークのはじめ方」「小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン」への参加を呼びかけたい。

令和 7 年度の FD 活動のうち、複合領域 担当者（令和 7 もしくは 8 年度担当）が参加した代表的なものは以下のとおりであった。

4 月	大学授業入門	1 名
2 月	全学 FD フォーラム	7 名
2 月	リフレクションセミナー	1 名
	グループワークのためのファシリテーション入門	1 名
	学生の主体的な学習を促す非同期型オンライン授業	1 名
前期･後期	グループワークのはじめ方	1 名